様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　７ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０１３２２

研究課題名（和文）宗教保守をめぐる政治思想史研究――アメリカ合衆国と大西洋世界

研究課題名（英文）Religious Conservatism in the United States and Transatlantic World

研究代表者
井上　弘貴（Inoue, Hirotaka）

神戸大学・国際文化学研究科・教授

研究者番号：８０３６６９７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はアメリカにおける宗教保守を（1）知識人研究という観点から、（2）環大西洋的視点に立脚して考察し、その内在的な論理を明らかにすることを目指した。当初、本研究は福音派に焦点を当てることになるとの仮説を立てたが、（1）を重視して検討を進めた結果、アメリカの保守主義の再編を主導しているのは、主にはカトリックの知識人たちであるという結論を得た。本研究はまた、宗教保守の主導的知識人に、ベンチャーキャピタリストとして名高いピーター・ティールを含めることが適切であるとの結論も得た。（2）に関して言えば、環大西洋での宗教保守の知識人のネットワーキングは緊密になっているとの結論を本研究は得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
2024年のアメリカ大統領選を控え、アメリカ国内の価値観の変化や、複数の価値観の間の対立の構図を把握することは、アメリカ研究において重要な課題である。本研究はこの課題に、知識人研究という観点からアプローチを試みた。SNSの普及した今日にあっても、価値や理念を体系的に構築する知識人の重要性はアメリカにおいて失われてはおらず、かれらの動向や主張を研究の対象とすることは、広義のアメリカ政治の動向を把握することに資することを示した。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine religious conservatism in the United States primarily (1) from the perspective of intellectual studies and (2) grounded in a transatlantic framework. Initially, it was hypothetically assumed that the study would focus on evangelicalism. However, by prioritizing (1) and advancing the research, it concluded that Catholic intellectuals mainly lead the restructuring of conservatism in America at the level of conservative intellectuals. Furthermore, through its research, the study concluded that it is appropriate to include Peter Thiel, widely known as a venture capitalist, as one of those leading the restructuring of American conservatism as a religious conservative. Regarding (2), the study concluded that the networking of religious conservative intellectuals across the transatlantic region is closely intertwined.

研究分野：アメリカ政治思想史

キーワード：ポスト・リベラリズム　ニューライト　カトリシズム　保守主義　キリスト教　アメリカ政治思想史　文化戦争

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

アメリカにおいて宗教保守、とくに福音派は、トランプ前大統領の岩盤支持層であるという報道が日本でもしばしばなされてきた。しかし、そうした福音派を含めた宗教保守は、一体どのような思想から成り立っているのか、必ずしも日本では十分に理解されてきていない。そのために、この点における日本のアメリカ理解は、いまだ表層的なものにとどまっているのが現状である。そこで本研究は、アメリカの宗教保守を社会的背景から外在的に説明するのではなく、その知識人たちの主張を環大西洋的視点から歴史的に考察することをつうじて、宗教保守の内在的な論理を明らかにすることを目指した。

２．研究の目的

本研究は、その時々のジャーナリスティックな関心から理解されがちなアメリカの宗教保守を知識人の動向という観点から捉えることを第一の目的とした。すなわち、宗教保守の知識人たちのテキストを内在的に精査したうえで、そのなかで用いられている諸概念や論理を析出し、テキスト間の相互作用や継承関係を確定することを目的とした。それによって本研究は、宗教保守たちの主張を内在的に理解し、かつ、それが有している歴史的な文脈と射程を把握することを目指した。

とりわけ、アメリカの宗教保守の内在的な理解をめぐっては、プロテスタント諸宗派のなかの福音派にくわえて、アメリカ国内外のカトリシズムや正教会の影響を軽視することはできない。そこで本研究は、上述の思想史的方法に依拠したうえで、環大西洋的な観点や視座からアメリカの宗教保守の理解を試みることを第二の目的とした。

３．研究の方法

本研究は思想史の方法に依拠しつつ、政治思想史の研究者と文学の研究者からなる分野横断的な研究チームを構成することによって、アメリカの宗教保守の研究に学際的な方法でアプローチした。そのうえで、1970 年代から今日にかけての宗教保守にかんする書籍、雑誌、あるいは今日ではインターネット上の論考を対象として、宗教保守の知識人たちの発言ないしは論争等を幅広く収集し、言説分析をおこなった。この作業をつうじて、宗教保守の知識人のネットワークならびに雑誌や団体の相互の関係の特定をおこなった。

４．研究成果

本研究は先に述べたように、アメリカにおける宗教保守を、(1) 主として知識人の動向という観点から、(2) 環大西洋的視点に立脚して考察し、その内在的な論理を明らかにすることを目指した。当初、福音派に焦点を当てることになるものと仮説的に想定していたが、(1) を重視して検討を進めた結果、知識人の水準においてアメリカの保守主義の再編成を主導しているのは、戦後のニューライトを形成した知識人たちがそうだったのと同じく、主にはカトリックの知識人たちであるという結論を得た。具体的には、ポストリベラル右派の知識人たちである。

ポストリベラル右派の代表的な知識人として、パトリック・Ｊ・デニーン、エイドリアン・ヴァーミュール、グラッデン・パッピン、チャド・ペックノルドらが挙げられる。かれらは 2021 年にサブスタックのようなオンラインサービス――ブログ、メールマガジン、ポッドキャストを一体的に利用できる点に特徴がある――を利用して「ザ・ポストリベラル・オーダー」というサイトを立ち上げ、言論活動を精力的におこなっている。そのほかにも、ポストリベラル右派としては、ロッド・ドレアやソーラブ・アーマリの名前を挙げることができる。アーマリはイラン生まれであり、13 才のときに家族とともにアメリカに移住した。ロースクールで学んだのち、ジャーナリストとして活動してきた。かつてはシーア派のイスラム教徒だったが、2016 年にカトリシズムに改宗している。アーマリは、2022 年 3 月に、保守知識人のマシュー・シュミッツ、そして左派のエドウィン・アポンテの 3 名で、ポストリベラルのウェブマガジン『コンパクト』誌を創刊するなどの言論活動を展開している。ドレアは、ペイリオコンの雑誌である『ザ・アメリカン・コンサーヴァティヴ』誌のサイトで常設コラムを長らく執筆してきた。近年ではハンガリーに在住し、『ザ・ヨーロピアン・コンサーヴァティヴ』誌の執筆者になっている。ドレアはカトリックから正教会への転向を経験している。

本研究は、ポストリベラル右派は、ふたつの点で従来のニューライトと断絶していることを確認した。第一に、かれらは過去のニューライトと同様にカトリック信徒が多いものの、従来のニューライトとは異なり、アメリカの体制それ自体への批判を強めている。具体的には、ポリティカル・コレクトネスを前面に押し出す今日のリベラリズムと対峙するために、保守は古典的自由主義を含めたリベラリズムと手を切るべきであると、ポストリベラル右派は考える傾向にある。

第二にポストリベラル右派は、市場や企業に明確な敵意を抱いていることを確認した。従来のニューライトとは異なり、ポストリベラル右派にとって、道徳と市場との調和は自明ではなく、むしろ今日のビッグ・テックと呼ばれる大手 IT ビジネスが典型であるように、市場や企業は自分たちの敵であるリベラルの味方であるとみなしている場合が多い。そのうえで、従来のニューライトとは異なり、かれらは国家権力にもっと依拠すべきであると考えている。そのようなポストリベラル右派の論者たちにとって、理想とすべき国家はアメリカではなく、たとえばキリスト教の価値観を擁護した政策を推進する東欧の国ハンガリーである。この点を考察するに際して（2）の観点の有効性が確認された。

（2）に関して言えば、ハンガリーのヴィクトール・オルバン首相、あるいはオルバンの演説のなかにも登場する「大いなる置き換え」という概念を生み出したフランスの極右思想家であるルノー・カミュとポストリベラル右派のとの交流が、近年では観察可能である。ポストリベラル右派の知識人たちは、オルバンに共感をもって言及するだけでなく、実際にオルバン自身と交友関係を保っている。たとえば、デニーンは過去にハンガリーを訪れ、オルバンと個人的に会談している。デニーンはオルバンとの会談の際、アメリカの保守のあいだでハンガリーは理想的なモデルになっているという発言をオルバンたちハンガリー側に対しておこなっている。こうした諸点をつうじて、環大西洋での宗教保守の知識人のネットワーキングは緊密であるとの結論を本研究は得た。

カミュのような極右思想家と、ポストリベラル右派とのあいだには、引かれるべき重要な一線があることは軽視できない。そうではあるものの、アメリカのポストリベラル右派のオルバンへの傾倒が端的に示しているように、戦後アメリカで保守陣営のゲートキーパーを務めてきたかつての主流以上に、ポストリベラル右派が極右思想に融和的傾向をもつことは否定できないところである。

本研究はまた、宗教保守としてアメリカの保守主義の再編成を主導している者のなかに、ベンチャーキャピタリストとして一般には名高いピーター・ティールを含める必要があるとの結論をあわせて得た。ティールは、2016 年の大統領選挙の際にはトランプを全面的に支持し、トランプの選挙勝利後は政権移行チームに名前を連ねた。トランプの娘婿であるジャレド・クシュナーともティールは親しい関係にある。ティールの部下だったＪ・Ｄ・ヴァンスとブレイク・マスターズは親トランプの政治家に転身し、2022 年の中間選挙でマスターズはアリゾナ州の上院議員選挙で敗北したものの、トランプに批判的だった過去のスタンスを放棄したヴァンスは、オハイオ州で共和党の上院の議席を獲得している。

福音派の両親のもとで育ったティールは、今日において標準的な福音派のそれとは異なるキリスト教信仰を保持していると想定される。ただ、ティールのキリスト教信仰が仮にどのようなものであるにせよ、ゼロから 1 を生み出すことに固執するかれの起業家としての信念は、ハルマゲドンの到来を恐れずに歴史を前進させることを重視する、黙示録に重きを置くかれの宗教的ヴィジョンを前提としたものであるという結論を本研究は得た。

ティールはニュージーランドの市民権を取得し、当地に広大な土地を所有していることは、かれが世界の来るべき破滅に備えていることのあらわれである。ただし、ティールはハルマゲドンによる世界の破滅を、ただシニカルに予知しているのではない。ティールが待望しているのは、ハルマゲドンのあとに続く（キリストの再臨と）神による世界の完成である。神の国の実現に向けて、われわれはスタートアップ企業をテコとして、テクノロジーを停滞させるのではなく、加速させていかなければならないのである。このように、一般にリバタリアンとして認識されることの多いティールのなかで、科学テクノロジーとキリスト教の信仰とは密接不可分なものとして結びついていることを確認した。

以上のように、宗教保守たるポストリベラル右派とビッグ・テックとのあいだには敵対的な関係が見え隠れしている一方で、ビッグ・テックを主導している起業家のなかには、まさにティールが典型であるように、テクノロジーと宗教との融合をはかろうとしている者がおり、このふたつを融合させる新しい宗教保守の登場がポストリベラル右派と連携しつつ、戦後アメリカ保守主義の再編というタイミングと軌を一にして生じているということを本研究は確認した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 井上 弘貴	４．巻 8
２．論文標題 賢慮との邂逅――ネオコンと福音派が保守になる日	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ひらく	６．最初と最後の頁 96-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井上 弘貴	４．巻 137
２．論文標題 変容と再編が進むアメリカの保守主義	５．発行年 2023年
３．雑誌名 中央公論	６．最初と最後の頁 94-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井上 弘貴	４．巻 23
２．論文標題 説得と抑制の政治思想――相川裕亮『ビリー・グラハムと「神の下の国家」アメリカ――福音伝道者の政治性』（新教出版社、2022年）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 政治思想研究	６．最初と最後の頁 460-461
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井上弘貴	４．巻 49-6
２．論文標題 ジョン・バーチ協会と「共産主義の第五列」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『現代思想』	６．最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井上弘貴	4．巻 5
2．論文標題 1619年と1776年――アメリカの成り立ちをめぐるふたつの歴史観の対立	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『ひらく』	6．最初と最後の頁 64-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井上弘貴	4．巻 701
2．論文標題 共和党の「トランプ化」に歯止めはかかるか	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『国際問題』	6．最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 井上 弘貴
2．発表標題 ブリティッシュ・イスラエリズムとアメリカ合衆国でのその受容
3．学会等名 日本イギリス哲学会関西部会第66回研究例会
4．発表年 2022年

1．発表者名 井上 弘貴
2．発表標題 ポストリベラル保守の知識人と権威主義
3．学会等名 日本政治学会2022年度研究大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 井上弘貴
２．発表標題 リベラリズムの否定か、別様のリベラリズムの模索か
３．学会等名 第43回政治哲学研究会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	片山　文雄 (Katayama Fumio) (40364400)	東北工業大学・総合教育センター・教授 (31303)	
研究分担者	石川　敬史 (Ishikawa Takafumi) (40374178)	帝京大学・文学部・教授 (32643)	
研究分担者	森　達也 (Mori Tatsuya) (40588513)	神戸学院大学・法学部・准教授 (34509)	
研究分担者	清川　祥恵 (Kiyokawa Sachie) (50709871)	佛教大学・文学部・講師 (34314)	
研究分担者	野谷　啓二 (Notani Keiji) (80164698)	神戸大学・国際文化学研究科・名誉教授 (14501)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	相川　裕亮 (Aikawa Yusuke) (30911911)	広島大学・人間社会科学研究科（社）・助教 (15401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関